

# 地球環境のために

「エコビジョン2050」の実現に向けて「中期環境計画2015」を策定し、具体的な目標を設定して、環境負荷低減に取り組んでいます。

## 「エコビジョン2050」と中期環境計画

コニカミノルタは、持続可能な地球・社会の実現に貢献し、グローバル企業としての責任を果たすために、2050年までに実現すべき姿を示した長期環境ビジョン「エコビジョン2050」を策定しました。

また、「エコビジョン2050」の実現に向けたマイルストーンとして、2015年度をターゲットとする「中期環境計画2015」を策定しています。この計画では、「地球温暖化防止」「循環型社会への対応」「化学物質リスクの低減」「生

物多様性への対応」の4テーマについて、具体的な取り組みと達成すべき目標を掲げています。

さらに、各目標の達成に向けて、各事業会社で単年度ごとの目標値を設定し、さまざまな施策を実施しています。2009年度の目標については未達成となった項目もありましたが、今後も2015年度の目標達成、そして2050年のビジョン実現に向けて、継続的な取り組みを進めていきます。

### エコビジョン2050

1

製品ライフサイクルにおけるCO<sub>2</sub>排出量を、2050年までに2005年度比で80%削減する。

2

限りある地球資源の有効活用の最大化と資源循環を図る。

3

生物多様性の修復と保全に取り組む。

### 中期環境計画2015

テーマ	主な2015年度目標(基準年:2005年度)
地球温暖化防止	製品ライフサイクルにおけるCO <sub>2</sub> 排出量: 20%削減 ● 製品使用に起因するCO <sub>2</sub> 排出量: 60%削減 ● 生産活動に起因するCO <sub>2</sub> 排出量: 10%削減(売上高原単位※1) ● 物流活動に起因するCO <sub>2</sub> 排出量: 30%削減(売上高原単位) ● 販売・サービスに起因するCO <sub>2</sub> 排出量: 50%削減(売上高原単位)
循環型社会への対応	石油由来資源の使用量: 20%削減(売上高原単位) 包装材料の使用量: 25%削減(売上高原単位) 生産活動からの外部排出物量※2: 50%削減(売上高原単位) 各地域における使用済み製品の再資源化体制の構築、再資源化率90%以上
化学物質リスクの低減	サプライチェーン※3全体を含めた化学物質の厳格管理を維持 VOC(揮発性有機化合物)の大気排出量: 75%削減(環境影響度指数※4)
生物多様性への対応	生物多様性の修復と保全に貢献する

※1 売上高原単位: 売上高あたりの環境負荷量。

※2 外部排出物量: 生産活動にともなって発生する総排出物量から内部リサイクル量と減量化量を引いた、コニカミノルタの拠点外に排出される量。

※3 サプライチェーン: ここでは、上流の素材会社から部品加工会社を経て、コニカミノルタに納品されるまでのルートを示します。

※4 環境影響度指数: VOC排出量に有害性係数(人健康影響、環境影響度)と立地係数をかけ合わせた、コニカミノルタ独自の指数。

## 2009年度の進捗状況 (目標値、実績値は2005年度比)

### 地球温暖化防止

コニカミノルタは、製品ライフサイクル全体を通じたCO<sub>2</sub>排出量※5削減に取り組んできました。「中期環境計画2015」でも製品使用、生産、物流、販売・サービスの各段階に対応した展開目標▶P17表を設定し、施策を推進しています。

2009年度は製品ライフサイクル全体で44.9%減となり、目標値(32.5%削減)を達成しました(グラフ1)。その背景には、景気低迷による市場稼働台数減少という要因はあるものの、省エネ性能の高いデジタル複合機の市場投入が、製品使用時のCO<sub>2</sub>削減に大きく寄与しています。しかし展開目標の残り3項目では、目標を達成できませんでした。生産活動では、収率改善や設備の最適運転などを進めましたが、景気低迷による操業度低下などの要因により、目標値に若干届きませんでした。物流活動では、需要変動への対応などともなう航空機輸送の増加が大きく影響し、未達成となりました。今後は需要予測の精度を上げ、航空機輸送の削減に努めます。販売・サービス活動でもわずかながら未達成でした。今後は販売・サービスの効率化により改善を図っていきます。

※5 CO<sub>2</sub>排出量の算出方法はP23に記載しています。

### 循環型社会への対応

石油由来資源の使用量削減については、「商品に使用する資源量」「生産時にロスとして発生する廃棄量」「販売・サービス時に使用する車の燃料使用量」の3つのテーマを設定して取り組みました。その結果、売上高原単位で18.2%増となり、2009年度の目標値(21.6%増以下)を達成しました(グラフ2)。

生産活動からの外部排出物量については、生産効率向上や内部リサイクル推進によって、総量では削減となりました。しかし売上高原単位では、生産時の排出物負荷が大きい製品の増産、原材料への不純物混入による突発的な廃棄発生などにより10.8%増となり、2009年度の目標値(1.7%増以下)を達成できませんでした(グラフ3)。今後は、「グリーンファクトリー認定制度」▶P19を通じて、事業ユニットごとの削減を進めていきます。

### 化学物質リスクの低減

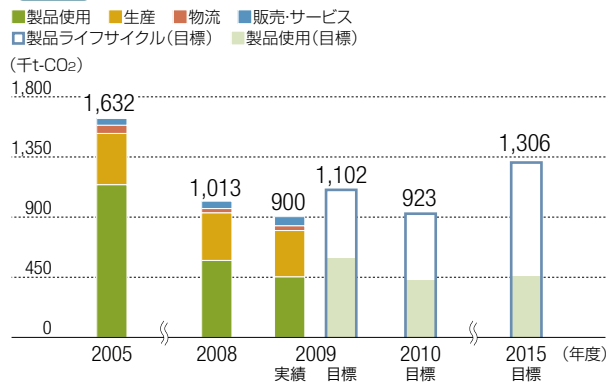
化学物質の厳格管理については、REACH規則※6および今後の化学物質規制に対応する「新グリーン調達システム」を核とした製品含有物質管理の仕組みを構築しました。また、VOC(揮発性有機化合物)の大気排出量は環境影響指数で78%減となり、2009年度の目標値(67%減)を達成しました。

※6 REACH規則：EUが従来の化学物質関連の規制を統合して、2007年6月に施行した、化学物質の登録、評価、認可、制限に関する規則。

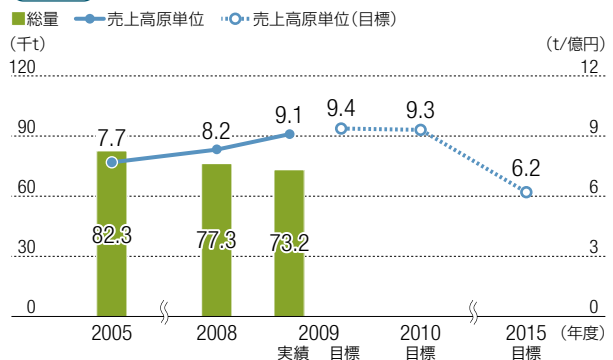
### 生物多様性への対応

2009年度は、コニカミノルタの事業活動と生物多様性の関連性を評価しました。その結果、情報機器事業における木材を原料とする紙資源の使用と、製品ライフサイクルにわたるCO<sub>2</sub>排出による地球温暖化などで、生態系への影響が大きいことを把握しました。こうした評価結果を踏まえて、今後は生物多様性の修復と保全に貢献する具体的な計画を立案していきます。

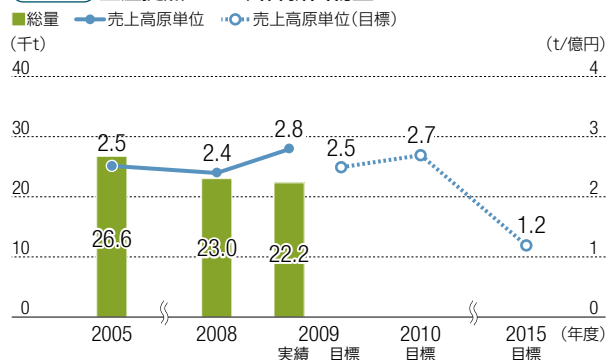
グラフ1 製品ライフサイクルCO<sub>2</sub>排出量



グラフ2 石油由来資源使用量



グラフ3 生産拠点からの外部排出物量



新中期環境計画への移行に伴い、「製品ライフサイクルCO<sub>2</sub>排出量」は過去のデータを含めて係数の見直しを行っています。また、「生産拠点からの外部排出物量」は研究開発拠点からの排出物量を含めたデータとして再集計を行っています。詳しくは、ウェブサイト(<http://konicaminolta.jp/about/csr/environment>)をご覧ください。